

教 名 聞

第 77 号
(発行日)

2017年2月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/~souan/

《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日 午後2時始。

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日と12日 午後3時始

○ 〈聖典学習会〉

毎月6日 午後7時始。

○ 〈真宗入門講座〉

毎月18日 午後6時30分始。

* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

業報にさしまかせて

真宗の聖典に『歎異抄』という書物があります。その第十三章に

「よきことも、あしきことも、業報にさしまかせて、ひとえに本願をたのみまいらすればこそ、他力にてはそうらえ」というお言葉があります。

この「よきことも、あしきことも、業報にさしまかせて」という意味ですが、「よきことも、あしきことも」といわれる「よきこと」「あしきこと」とは、自分の行い(身口意)の上にかかる善であり悪でありましょう。

この歎異抄で言われる(業報)ということは、過去の業(自分の善悪の行い)が、現在の私の心や行いの上に報い現れてきて、現在の私の心や行いを制限束縛するので、自分の心も行動も自由にはならないという、いわば自分で自分をコントロールできない身、自分の思案や努力で悟り(幸せ)を実現することができない身であるといわれ、自らの

力では迷いを離れることはできないという自覚をうながす言葉です。いわば、自分が過去の業に縛られて、自分で自分を変えることのできない存在だということを言おうとされる言葉なのです。

それゆえ「阿弥陀仏のご本願をたのんで念仏申して生きなさい」と仰せられるのです。

この「よきこと」「あしきこと」をもう少し広い意味に理解して、「よきこと」とは自分にとって都合の良いこと、「あしきこと」とは自分にとって都合の悪いことと受けとることもできましょう。

具体的に良いこととは、体調が良いとか、試験に合格するとか、いい就職口が見つかるとかなどと考えても良いでしょう。

そして「あしきこと」とは病気になるとか、交通事故にあうとか、借金をかかえこむとか、などと受け取ることもできましょう。

一般には都合が良いことは当然受けとりやすいですから、苦しむことはないでしょうが、「あしきこと」が降りかかってくると、なかなかそれを受け入れることは難しくなります。

たとえば治りにくい病気にかかると、それをそのまま受けとめられず、「なんでこんな目にあつたのか、何も悪いことをしていないのに」と嘆いたり、「自分は運が悪い」とか、あるいは「かかりつけのお医者さんが十分診てくれなかつたから」とか「弱い体に産んだ親が悪い」などと他者を責めたり、ややもすると「先祖のたたりだ」「先祖のバチがあつた」などといった、こうした愚痴が出てきます。

長年難病で歩行も困難なお方がおられ、その方が時々「お医者さんから百人に一人位の格率でこの病気にかかる」と云われるのですが、どうして私

がその一人になつたのか。何も悪いことはしてないのに」と云われます。そういうのも愚痴と云えば愚痴ですが、よく分かります。だれでもそう云いたくなると思います。

ただ、いくらそう云つてみたところで現実には変わらないし、変わらないからこそ愚痴が出るのでしょう。こんな時にカウンセラーなどに相談しますと、「それは大変お辛いでしょうね」と同感して下さるのでその時は少し楽になりましょうが、多くはそれ止まりではないでしょうか。

そういうような「あしきこと」になつた時、グチつてみても、あるいは他者や世の中を責めてみてもどうにもなりません。

この歎異抄のお言葉では「業報にさしまかせて」といわれ

《念佛寺永代経法要》
四月二十二日(土)

午後二時始

法話 渡邊 愛子 先生

* 同日(四月二十二日) 午前十時・勤行法話

(念佛寺住職の法話です)

ていますが、業報とは過去の善悪の行い（業）の報いといて苦・楽という結果が現れてくるということです。

こういう業報の話に対して、それを否定して「業報だなどといわれるのは納得がいかない」と思われる方もあります。

一方「自分には分からないけど過去の自分の行いの結果が現れて今の状態になったのだらうなあ」と受け取るお方もあります。

ただ、こういう（業報）ということとは仏の教をお聞かせにあずかる自分自身への反省においていわれることであつて、たとえば病気で苦しんでいる他者に対して「あんたが病気なのはあんたの過去の罪業のせいだ」などと他者を責めたり、あるいは教えさとしてたりする、いわば私たちが他者に対していう、そういう話しではありませんので、この点は十分注意をしなければなりません。

実際、病気になるたという場合、病気に自分がかかるといふ条件はいろいろあります。老化とか、他者から感染するとか、たまたま食べた

ものが悪かったとか、職場の劣悪な状態とか、空気や水の汚染とか、遺伝的な影響とか、さまざまな縁がありましよう。だから自分の業報だといわれて納得できないといわれることも、その通りだと思えます。

ただ、それは当然ありながら、「業報なのだ」との言葉によつて、苦しい状況に陥つた時に、自らの罪をそこに感じて「ああ今までどれほど多くの他の生き物の命を奪つて食べてきたことか、そうした罪の結果が我身に現れても仕方が無い、当然なのだ」と自分の罪悪の身であるという自己批判をさせて下さるお言葉として（業報）からお聞かせいただくこともできるのではないでしようか。

そこでこの歎異抄十三章の「よきことも、あしきことも、業報にさしまかせて」といわれるのは、「あなたの身の上に起こる良いことも悪いことも、過去のあなたの業（行い）の結果が現れてきたのであつて、それは今どうすることもできないが、それはそのまま」と言われるのでしよう。

そういうことで歎異抄のお言葉は、私たちの業報を

単に指摘するのが目的ではありません。

それは、いろいろ現実の思い通りにならない事にあつてグチつてしまう私に、まずは「汝は業報に縛られた不自由な身であるが、それはそのまま」と示し、そしてお勧めになるのは「本願をたのみまいらせ」と仰せ下さる大悲なところなのです。

ですから「業報だから仕方がないからあきらめよ」とおっしゃっているのではないのです。

仏教は、苦しみをやつてきたときに、「仕方がない、それはお前の責任だ」と、自分の都合な状態を無理に受け入れさせようとする教えではありませんし、また「汝は罪深い者なのだ」と自己批判をさせるだけの教えでは勿論ありません。

歎異抄十三章の主旨はそうした業報の話ではなくて「本願をたのめ」と仰せになる、ここが主眼なのです。

ですから、たとえ業報で都合の悪いことが起こつたのだという話に納得できなくてもよいのです。ただ「本願をたのめ」との仰せにしたがうこ

と、それがここではお勧めなのです。

「本願をたのめ」とは、具体的にいいますと、「我が名を称えよ」との仰せのままにお念仏を申し、お念仏を聞くことです。辛くて苦しい現在の状態を嘆いたり愚痴を言つている私に、「そのままなりで我をたのめ」「我が名を称えよ」との仰せであり、仰せのままにお念仏申すことでもあります。その仰せを聞くことであります。口に現れ、耳に聞かしめられるナムアマミダブツ。そのナムアマミダブツの声は「我は汝とともにいる、汝を抱いて離さない」「引き受けている」と呼びかけたもう阿弥陀仏の仰せであります。

阿弥陀仏は今ここにともにまします。大いなる大悲のいのちの働きであり、声（ナムアマミダブツ）であります。それを聞かせていただく。

そのお念仏において「ああ阿弥陀様が私とともにいて下さる。私の人生の重い荷物をともにになつて下さっている」と聞かせていただく、それが「本願をたのむ」ということでもあります。

阿弥陀仏が私のいのちの主であり、阿弥陀仏が私の人生

の土台になつて下さっているのです。阿弥陀仏のいのちの外に私はないのだといふことがほのかながらも知らされ、業報の身を越えた阿弥陀仏のいのちを知らされます。本願をたのむとはその阿弥陀仏に業報の身を引き渡すことなのです。

そこに業報の苦悩多き身でありながら、重い障りを軽く受けていき、生きる力を与えられてくるのです。

こうして阿弥陀仏が主になつて下さつていくという智慧が与えられます。その信心の智慧こそ、自分の都合の良いことも悪いことも、阿弥陀仏のおんいのちの中であることを知る智慧であり、重い障りを軽く受け取らせて下さる智慧なのです。（了）

《訂正箇所》

『松並松五郎念佛語録』

* 219頁3行目

逃げ出すことの身↓逃
げ出すことの出来ぬ身

* 239頁9行目

ほれらえて↓↓ほれられ
て

七宝講堂道場樹

(和讃問答)

七宝講堂道場樹

方便化身の浄土なり

十方来生きわもなし

講堂道場礼すべし

(語句)

七宝——金・銀・瑠璃・珊瑚・琥珀・碑磔・碼碯などの宝石。

現代語訳——七宝で飾られた講堂や、おさとの木である道場樹(菩提樹)があると説かれてお浄土は、衆生を真実の浄土に導くために、仮に設けられた方便化身の浄土である。この方便の浄土へ十方世界から往生する人々は際限がない。このように講堂道場樹などの方便の手だてでお導き下さる如来浄土を礼拝せよ。

* *

N 「このご和讃ですが、(七宝講堂道場樹 方便化身の浄土なり)とはどういう意味ですか」

D 「宝石でできた講堂とか、おさとの木である道場樹(菩

喩的に説かれ、(浄土には金銀宝石で出来た建物や樹木や池があり、美しい声で鳴く鳥が飛びかい、美しい花が咲き、寒からず熱からず、また美しい音楽が響いているなどと説かれていきます。それはその説法を聞いて私たちが(ああそれほど尊く有難い世界である浄土に私も生まれたい)という願い(願生心)を起こす。そのために説かれたといえましょう」

N 「阿弥陀経では浄土のことを極楽といわれ、(極楽国土には、七宝の池あり。八功德水その中に充滿せり。池の底にもつばら金沙をもつて地に布けり。四辺に階道あり、金・銀・瑠璃・玻瓈、合成せり)など、浄土の池は浄らかな水が満ち、池の底は砂金がしかれ、池の周りの道は金銀宝石で飾られているなどとも説かれていますね」

D 「ええ、お経が説かれた対象はインドの一般大衆でしょう。インドの大衆にとつては宝石とか金銀はこの世での最も価値のあるものであり、それでもって浄土ができていくとの仏陀の説法を聞くことによつて、浄土をイメージし、浄土に生まれたいという心(願生心)を衆生が起こす。そう

いうように浄土へ生まれたいという心(願生心)を起こさせるために、方便(教育的手段)として象徴的、比喩的に仏陀が説かれたといえるのですね」

N 「もし釈尊がインド人ではなくて日本人の大衆に浄土を説かれるとするとまた違った風にも説かれるかもしれませぬね」

D 「そうかもしれませぬ」

N 「ただここではその浄土は(方便化身の浄土なり)といわれませぬ。これはどういうことなのですか」

D 「このご和讃では、衆生に願生心を起こさせるといふのは違った意味でおっしゃっています。聖人は無量寿経に説かれてお浄土でできた講堂(説法の場所)や道場にある菩提樹(道場樹)などと説かれている浄土は、真実の浄土(真実報土)ではなくて(方便化身の浄土)だところでは云われています」

N 「では方便化身の土とは」
D 「方便化身とは方便化土ともいわれ、真実報土に対していわれる浄土です。真実報土は法蔵菩薩が願行成就してしあげたもうた真実の世界であつて、清浄であり、光明に

輝き、はかりなき寿命の不可思議なおさとの領域なのですね。それにたいして方便化土は真実報土に衆生を導き入れるために如来法蔵様が仮に設定されたお浄土です」

N 「なぜ方便化土が説かれたのですか」

D 「阿弥陀仏の浄土に生まれたいと思つても、自力疑心を離れることができず本願を信じていることが出来ない者、そういう者をも真実の浄土に導かんとつて、(へ生まれしめ、そこで自力の心いわゆる本願を疑う罪を自覚させ罪を除いて弥陀の本願を信じて)浄土に教化する場所、そういう場所としての仮の浄土のことです」

N 「それはどこにあるのですか」

D 「真実浄土の真ん中ではなくてかたほとり(辺地)にあると説かれています。かたほとりという意味は、真実浄土の中にあつても自分の自力疑心の想念によつて覆われている状態(領域)の領域であるといえるのではないのでしょうか」

N 「方便化身の浄土は、自力疑心の者をそこで教え育てて疑惑の罪を自覚させて弥陀の救いに目覚ましめるために阿弥陀仏が設けられたのですね」

D 「ええ、それは疑心自力にとどまる衆生が多く、そういう衆生を放っておけない。いかにしても真実の浄土に生まれさせて仏にしてやりたい、せぬ阿弥陀仏の大悲から設けられた世界でありましょう」

N 「この世で皆が皆真実の信心を頂いて真実報土の浄土に生まれる者になるというのが理想ですけど、衆生の自力執心は強く、仏智を疑惑する心は離れがたく、それゆえこの世で阿弥陀仏の本願におあいしてもなお自力を募り、仏の本願を疑ってこの世の生を終えてしまう、そういう衆生にもなお手を差し下さる、そこへと生まれしめて、自力疑心の罪を自覚させ、弥陀の本願の広大な働きに気づかせようとして設定された浄土が方便化身の浄土といわれるのですね」

D 「ええ、ですからこの浄土にも
十方来生きわもなし
で、十方世界から化土に生まれる衆生は際限ないほど多いといわれるのです。それほどまでに大悲を注いで真実報土に生まれて仏にならしめたいという弥陀の大悲は深いのです。ですから講堂道場の化土

までもご方便下さる弥陀の大悲を思つて、如来浄土を礼拝せよとお勧め下さるのです」

N 「方便化土が説かれている意義が少し分かつてきました」

D 「これについて、参考になる話があります。実はキリスト教においてもこうした問題は深刻な問題なのです。この世でキリスト教に入ってもキリストへのまことの信仰を得る人は多くはありません。そういう人はどうなるのかという問題です。キリスト教では人が亡くなるとこの世の終末（あるいは直ぐに）に、神の裁きによつて天国に生まれるか地獄に生まれるか、あるいは煉獄に生まれるか、といわれます。ひとたびそこへ生まれるたらもうそこからは出ることに無い、と説かれていますね。しかし、皆が皆、キリストを信じて天国に生まれるということはない。いやそれぞれどこか、天国に生まれる人は少数だといえます。そうすると後の者は地獄なりに生まれて、それで一切終わりとなる。そうすると救われる人はわずかなりましょう。そういう大きな問題にたいして、野呂芳男（神学博士。一九二五〜二〇一〇）は、それでは神の愛

は限定的なものにすぎないと考え、仏教思想に影響されて、神を信じることのできない不信仰な者もこの世が終わってすぐに天国に生まれなくても、天国への道程としての世界（ステージ）に生まれさせ、そこで教育し訓練して、真実の信仰を持たせて、やがて天国に生まれさせようとして下さる、と説きました。天国に生まれることのできない不信仰な者を導き訓練する領域を考えて、そこに生まれさせて、天国へ導こうとされる。それが愛の深い神である、と説いたのです」

N 「そういうことを思いますと、阿弥陀仏が方便化土という教育的な世界を設定されて、そこへ疑惑不信の者を導き入れて救つていこうとされたのは深い大慈大悲の思召しからなのです」

D 「ええ、そこまでのご配慮をして下さった大悲です。仏教思想になじんでいた野呂氏はそういう仏教の考えに大きなヒントを得たのだと思えます。私は野呂教授のこの話で逆に、無量寿経に、阿弥陀仏が方便化土を設けられたことに、どんな者をも見捨てず救わずにおかないという大悲の深く広いことを感じます」

お便り

念佛聞法者Aさんからの便り（抜粋）（二〇一七年一月）

*

本日も聞かせて頂き有難うございました。業報は他者に使う言葉では無く、自らの身

にのみ引き当てる言葉だと教えて頂きました。また、法然、親鸞両聖人、ともに「道が無くなつてしまった方々」のお言葉が響きました。肉のかたまり、我執我愛のかたまり、である私に、だから「汝を捨てない、我が名を称えよ」の如来の仰せがかかっていること、しみじみ思います。

「ただ我が名を称えるばかりで助ける」という言葉・形・声を、ただ認識するのではなく、一声称えさせ聞かしむる如來の本願力、その「どうしても救わずにおかん」の無縁の大悲によつて往生させて頂くのであつて、決して我が身、我が心、我が口、行いにもう用事はないのであります。専ら大悲を仰ぎ、ただ念佛を聞かせて頂くばかりです。引き続き大悲をお聞かせ下さい。南無阿弥陀仏

（了）

【法味寸言】

佐々木蓮磨師

一。他力の信とは、私にはイキの切れるまで信がないと知らせてもらうこと。

一。順境は仏からはなれやすく、逆境は仏に近づきやすい。

一。誰の話聞いても、よいところを取つてよるこべるのが念仏者。

〈遠方法話予定〉

*二月十七日。愛知県刈谷市。乗願寺。午前十時から午後三時まで。

*三月四日。福井別院。午前十時。法話座談

*三月十七日。名古屋市。高畑開法会館。午前十時。法話座談

*四月十五日から十六日。広島市。龍善寺。

午後から午後まで。

*五月十日。名古屋市。高畑開法会館。午前十時。法話座談。

*五月十九日から二十一日。福井別院。午後から午後まで。法話座談。

（詳しくは念佛寺にお尋ね下さい）

